

宇宙人ジョーンズ?幻想郷調査延長記録

もっちい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意：この作品は当サイトのキング・アナコンダ様の作品「宇宙人ジョーンズ? 幻想郷調査結果報告書」に触発された三次創作です。

氏に許可を頂いた上で、文の構成については意図的に似せてあります。

最終回の後、もしジョーンズが留まって未登場キャラと交流があったら：そんな作品です。

目次

滞在記録：農村	1
滞在記録：博麗神社、人里	4
滞在記録：農村その1、5	8
幕間	
滞在記録：農村その2	11
滞在記録：命蓮寺く人里間の道	14
滞在記録：???	17
滞在記録：農村その4	20
転戦記録：外く天界 幕間	24
滞在記録：天界、比那名居邸	28
滞在記録：農村その5	32
滞在記録：人里の寺子屋	36
滞在記録：街中く農村その6	41
外出記録：『外』某所、撮影スタジオ 幕間	44
滞在記録：玄武の沢 前編	47
滞在記録：玄武の沢 後編	50
滞在記録：玄武の沢 後編 if	54
滞在記録：農村その7	57
滞在記録：農村その8 前編	60
滞在記録：農村その8 後編	63
滞在最終記録：農村その9	68

滞在記録：農村

『……………（シユバババババ）』

「なあ、俺達は何しに来たんだったっけか？」

「そりやおめえ、お前んとこの田植えだよ」

「嘘つけ、もうジョーンズさんが殆どやつちまつてるじゃねえか」

——この惑星の住人は、古来より伝わる農業と呼ばれる方法で食物を作り出している。

「いや、経験があるって言うんで苗を持たせたら思ったより早いんですよ」

「それにしたってあれは……」

「そーいや聞いた事があるぞ、なんでも外の世界には『タウエキ』とか言う奇怪……いや機械があるらしいな。唐傘やお面の付喪神が居るくればだ、もしかしたらあの人も……？」

「流石に神という言葉まで出てきて、黙っているのも我慢出来ないものね」

「うおっ!？」

「み、穰子様じゃあないですかい！ まだ五月ですぜ！」

「まだって何、秋より前に呼んでくれないと豊穰の約束は出来ないって言ったでしょ」

「それより穰子様、それにしたってどうしてわざわざ来て下さったんです？」

「まだ降りてくるつもりは無かったんだけど、期待の新人が来たって噂がね」

——以前調査した時の田植えは、その一部分に過ぎない。

「ほら、ぼさつとしてないで苗を貸して。それとも彼にだけ働かせて自分達は休むつもり？」

「そんな滅相もない！　と言うか待つて下せえ、穰子様もやるんで？」
「当たり前じゃない、外から来た人に任せきりじゃ豊穰の神の名が廢るもの」

「……分かりました。俺も付いて行きます」

「そ、それなら俺たちも手伝いますだ！」

——外と変わらず、かなりの重労働だ。

「いやゝ驚いた、まさかジョーンズ様と穰子様で全部一日で終わるなんてなあ」

「流石にちよつと本気を出し過ぎたわね……」

「才疲レ様デス」

「張り切る気持ちは分かるけど、ペース配分てものがあるでしょ」

「まあまあ穰子様、飲み物を持つてきましたから」

「あら悪いわね」

「ほらジョーンズさんも、これ好きだったろう？」

「……！」

——ただ…。

「おつ、そいつは外の世界にある缶コーヒーって奴ですかい？」

「ああ、誰が仕入れたかは知らないが、街で売ってたのを家内が買ってきたんだ」

「へえ……最近じゃ飲み物まで見た目が派手になってるのね」

——ここ幻想郷の農村も…。

「すまない、ジョーンズさんはおるか？」

「……………」

「あ、村長さんじゃないですかい！」

「おお穰子様、もう来て下さっているのですか。ありがとうございます
たや」

「前回の祭り以来ね、こっちこそ挨拶も無しでごめんなさいね」

「いやいやお陰様で今年も……おっと、本題が別にあるのでした。

ジョーンズさん」

「……？」

「突然ですまぬが……これからもこの村に住んで貰えませんか？」

「……………」

※ ※ ※以下ジョーンズの脳内※ ※ ※

(調査)

←

(調査)

←

(調査)

←

(調査) ☆【村に定住】

←

(調査) 【村に定住】

←

査) 【村に定住】

※ ※ ※以上ジョーンズの脳内※ ※ ※

——沁みる。

滞在記録：博麗神社、人里

前：博麗神社

——全く、ろくでもない惑星だった。

「……………（ガラガラガラ）」

——私に帰還命令が下ったのも、当然なのかも知れない。

「……………（パン、パン）」

——ここ博麗神社は、「外」との境目になっている。

「あら、ジョーンズさんじゃない」

「……………」

「ここに来てくれるのも久しぶりね、元気にしてた？」

——我々の技術をもってすれば、今すぐに脱出する事もたやすい。

「顔ヲ出シタダケデス」

「あらそう……………そうだちよつと待って」

「……………？」

「以前の鍋……………ありがとう。それだけよ」

「……………（スタスタスタ）」

「行っちゃった……………しかしこの辺りも色々いるのによく一人で来れるわねあの人」

「まあ良いわ、賽銭箱でも覗い」

「…………何これ」

——ただ…。

「箱一杯の札束……半両銭なんて始皇帝時代の代物じゃない、貨幣の博物館が開けそうね」

「ジョーンズさんが来る前はこんな事は無かったのに、何者なのかしら」

「ま、数え終わって使い道決めてから考えましょ。ひい、ふう…」

※ ※ ※ 場面変わって街中 ※ ※ ※

「さあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい！ 今日はこの様な珍品を仕入れたよ！」

「ヒトツクダサイ」

「おお、あんたも御目が高い！ こいつは外から仕入れた飲み物だ、眠気覚ましに効くぞ！」

「…………」

「まいどあり、友人への宣伝も頼んだぞ！」

「…………（プシュ）」

——この惑星の缶コーヒーだけは、やめられない。

後：人里正面入口の門

——私は何故、ここ幻想郷に留まり続けているのだろうか。

「……………」

——もつと調査するべき事が、「外」には幾らでもあるのだが。

「……………」

(お腹空いた……最近じゃもう誰も驚いてくれないし)

「……………」

(お？ 今日の門番は見た事無い人……いける！)

「……………」

(後ろは壁だし、なるべく壁添いに慎重に……)

「……………」

(この距離なら………！)

「うらめしやー！」

「コリャアアアアア!! (クワツ！)」

「……………」

「……………」

「あああああおばけええええええええええ!!」

「……………」

——この間は、何故か調査の延長まで申請してしまった。

「お、ちゃんと見張ってくれてるようだな、感心感心」

「才疲れ様デス」

「いきなりで夜番を任せてしまつて悪いな、何も異常は無かったか？」

「異常アリマセン」

「そりゃ良かった、たまに妖怪がちよっかいを出そうとしてくるから
気を付けろよ」

「……………」

——ただ…。

「じゃ、そろそろ夜明けの時間だから交代だ」

「分カリマシタ」

「それとほれ、これでも飲んで休んでくれ、好きだったろう？」

「……！」

「お、丁度朝日が見えてきた。今日も平穩無事であつて貰いたいね」

「……（プシュ）」

——幻想郷の夜明けも、やっぱり美しい。

滞在記録：農村その1. 5 幕間

※ ※ ※村中央集会所※ ※ ※

／
ミーンミーンミーン
＼

「暑い：暑すぎるわ……」

「そりやあ仕方ねえですぞ穰子様。夏は暑いって相場が決まってま
さあ」

「そうは言うけどねえ……あうー」

——この惑星の住人は、気温が多少上下しただけで、

「タライに水溜めてもすぐにお湯になるし……嫌になるわね」

「しかし：穰子様も神様なのに、あつしらみたいに暑がるもんですか
ね」

「あのね、神と言っても私は全知全能じゃないの。実体はあるし暑
いものは暑いのか（パタパタ）」

「そう言う割に帽子は取らないんですねえ……」

「これだけは私の看板だもの、譲れないのよ（パタパタ）」

——直ぐに音を上げる。

「ただいま、戻ったぞ」

「……………（ノツシノツシ）」

「あら、ジョーンズさんまで連れてどこに行つたのかしら？」

「何か涼める道具が欲しくて香霖堂まで行つてきた。思った通り収
穫があつたぞ」

「へえ、涼める道具ね。何があつたの？」

「『扇風機』っていうらしい。動かす為の『バッテリー』も一緒にな」
「……………」（ヨッコラシヨ）」

——この惑星より暑い、または寒い惑星は、宇宙には幾らでもあるのだが。

「ジョーンズさん、動かしてみてくれ」

「ワカリマシタ（ポチツ：ブワアアーン）」

「風を起こしてくれる機械……あの店本当に何でもあるのね」

「扇風機もバッテリーも大分古そうな代物だったけどな。正直動くとは思ってなかった」

「あー…あー」（ブオオーン）」

「ちよつと、扇風機独占した上に何やってるのよ」

「いやあ、何かこの、『扇風機』の前で喋ると声が変わるみたいでさ」

「これは涼む機械なんですよ？ 私もまだ暑いんですけど……」

「……………」

「どうしたのジョーンズさん、やってみたいの？」

「……………」（コクリ）」

「仕方ないわね、運んできたのはあなただし」

——ただ…。

「『私ハ……宇宙人ダ……！』（ブオオーン）」

「……………」

「……………？」

「ジョーンズさん、あんた…何というか、凄いな」

「へえ、まるで本物の宇宙人みたいでさ」

「結構真に迫った演技じゃない。私も本物かと思ったわ」

「……………」

——この惑星の、扇風機の前では、

「それじゃあ私も…『愚カナ人間ヨ…私ヲ崇メヨ…!!』(ブオオーン)」

「ちよ、穰子様！ それじゃあ邪神じゃあないですかい!!」

「ふふ、これで少しは貫禄が出たかしら？」

「貫禄と言うか、禍々しさだと思っけどな」

「それじゃ、あっしももう一つ…『王様の耳はあ、ロバの耳ー!』(ブオオーン)」

「それは何か違う」

——宇宙人だと自白しても、悟られない。

滞在記録：農村その2

——この惑星の神々と呼ばれる者達は、人間の信仰を糧としている。

「……………(ジユツ)」

「いやあジョーンズさんに穰子様まで居ると捗るなあ」

「喋ってないであんたも手を動かしてくれ、まだまだ雑草は幾らでもあるんだからな」

「いやあ、目から光線出して雑草を枯らすなんて、そうそう出来る事じゃないと思いますぜ」

「本当か？ 確かに目が光ってるが……………」

「本当ですだ、ほれこれが問題の草でさあ」

「何だこれ……………ご丁寧に根っこまで干からびてやがる」

「さつきまで青々として伸びてたのが、ジョーンズさんが見た途端急に」

「目から光線の一つも出せなくて悪かったわね、弾幕なら出せなくもないけど」

「うおっ穰子様！ そ、そんなつもりで言った訳じゃ……………」

「はいはい。手を動かして……………と言いたいけどそろそろ休憩にしましょうか」

「分かりました、俺はジョーンズさんを呼んできます」

「じゃ、あつしは飲み物と菓子を準備してきますだ」

——八百万も存在する神々の全てが、信仰を得られる訳ではない。

「今年も俺の田畑は無事に収穫を迎えられそうです、ありがとうございます
います」

「私だけの力じゃないわ、田畑の世話をする人が居るのが前提だもの」

「へい、飲み物をお持ちしやした」

「ありがとう、こういう時は麦茶に限るわね（ゴクゴク）」

「しかし、こう何度も雑草が生えてくると中々手が掛かるな」

「言いたい事は分かるわ。でも化学肥料や農薬はなるべく使わないで貰えると有り難いわね」

「ええ、分かっています」

「へえ、『外』にはそんなよく分からない代物が有るんですかい。でもそりゃあ何故です？」

「知つての通り私は豊穰の神。でも実際、私自身は『大地や作物が元々持っていた生命エネルギー』を引き出す手伝いをしているに過ぎないの」

「だから化学肥料で土地の性質を変えて、農薬で虫まで全滅させてしまおうと……もう私の力は及ばないわ」

「それで、手を掛けてでも自然農法が良いと仰る訳でしたか」

「……うん？ ちよつと待ってくださいえ、それじゃあ『外』は」

「察しが良いわね。元々は私も姉さんも『外』に居ただけど、あつちじゃ肥料や農薬、機械まで出来てね」

「天気、土地、作物の品種。全部人間がやっってしまうようになって……既にもう、居場所はここしか無いのよ」

「……大丈夫です穰子様、俺もこの村のみんなも、あなた様に付いて行きますから」

「そうそう旦那の言う通りですぜ！」

「ありがとう。その言葉だけで十分よ」

「……………」

——ただ……

「しかし、九月にもなると風も冷えてくるようになってきたな」

「ええ、暑くなくなってきたのは有り難いわね」

「さ、そろそろ再開と行きますかい？」

「ワカリマシタ」

——この惑星の神々には、

「お！ 旦那、穰子様、ジョーンズさん！ あの山を見てくださええ！」
「どうした？」

「あの辺りで紅葉が見え始めましたぜ」

「あら、例年にしては早い方ね。 姉さんも随分と張り切ってるのかしら」

「ここから山全部が紅くなっていく訳だ、楽しみだな」

「ええ、私も負けてられないわね。 さ、続き続き！」

「……………（プシュ）」

「まだ飲んでなかったんですかいジョーンズさん」

「スグニ行キマス」

——愛されるという、生き方もある。

滞在記録：命蓮寺く人里間の道

「いやあ助かったぞ、まさか『タクシー』を拾えるとは」

「……………」

「自力で帰れない事も無いんじやが、人里の飲み屋にちと長居し過ぎたからの」

「……………」

「しかしおぬしも、随分とけつたいな商売をしておるのう」

「……………」

「文明の利器たる自動車があるのは分かる。流れ着く以外に持ち込まれる事もあるしの」

「……………」

「ただ、今のおぬしの商売、どうしたって儲かるとは思えないんじやよ」

「ここ幻想郷は妖怪に神々の天下。人間は人里に集まって暮らしておるし、遠くに出向くような用事を持つ者は少なくとも儂は知らなんだ」

「そして力ある人間、また儂のような人ならざる者は皆身一つで空を飛べる」

「……………一体どこに需要があると言うんじや？」

「……………」

「にも関わらず儂が千鳥足で店を出た途端、タクシー後方のドアを開けたおぬしが待ち構えていた」

「以前は気にも留めなかったが、怪しげな術を幾つも使う癖に妖気の類がまるで感じられん」

「それに何の動きも無い所を見るに、どうやらあのスキマ妖怪ですら気づいておらんようじやな」

「……………」

「当てるやろう。おぬしは恐らく月どころか『外』、それも空の遥か

彼方よりやって来たを見た」

「……………」

「おっと、だからと言って事を構える気は無いわい」

「年だけならこの長生き連中には負けるが、儂とて知り合いに呼ばれるまでは『外』でそれなりの時間を過ごしておる。単にお前さんのような者を何度か見た覚えがあっただけじゃよ」

「今のおぬしはタクシー運転手で儂は客。命蓮寺に着くまでの間位、愚痴の一つも聞いてもらえんかの？」

「……………」

「この星で起きる事はむかーしから訳のわからん事ばかりじゃった」
「……………」

「特に最近はずっと訳が分からん。『外』もここもな」

「ただの野良狸だった頃からずっと見てきたが、今程皆が下を向いている時代はなかったかも知れんな」

——ただ…。

「…………… (カチツ)」

♪ ♪ ♪

「ほう、『上を向いて歩こう』か……中々に味のある良い曲ではないか」
「…………ふむ、雲一つない満点の星空に満月。清々しい程良い眺めじゃの」

「…………こうしてゆつくり見上げる機会も、あまり無かった気がするわい」

「………… (パチン)」

「ほうっ、流星か！ 見上げた途端にこれとは、面白い偶然もあったものじゃ」

「…………」

(おぬしも、随分と味な事をしてくれるものじゃの)

——この惑星の住人は何故か、

「おっと、寺が見えてきた。 儂はそろそろ降りるとするぞ」

「ワカリマシタ」

「おぬし、以前に関わった者や場所を避けているように見えたのでな」
「……………」

「寺まで少し距離はあるが、ここからは自分で歩いていくぞ」

「おっと、これは乗車賃と…………チップ代わりじゃ」

「…………！」

「おぬしの好みは寺で見たから知っておるぞ、楽しませてくれた駄賃
だと思ってくれ」

「それと最後にもう一つ。おぬしがどの位この星に留まっているの
か、儂は知らぬ」

「だがここの中でさえ、理解が及んでいる物は少ないのではないか？」

「……………おぬし、まだ先は長いぞ」

「……………(プシュ)」

「……………(ゴクツ)」

アオーン

——上を向くだけで元気になれる。

滞在記録：???

「よお兄弟、こんな所で立ち止まってるつもりかい？」
「……………」

——この惑星では、しばしば「理不尽」と遭遇する。

「さあ兄弟、この袋とブーメランを装備するんだ、修行はまだこれからだぞ」

「嫌デス」

「まあまあそう言わずに！」

「……………ッ！」

「よし出来たな、この罪の字は俺が書いたんだ。良いもんだろう？兄弟」

「さ、他の兄弟達も待ってる。まずは体力づくりの基礎、走り込みだ！」

——神々や妖怪の範疇にすら入らない存在、突飛な他人の考え方。

「1、2、3、4！」

「……1、2、3、4、1、2、3、4!!」「……」

「ゆかりんゆかりん可愛いよ！」

「……ゆかりんゆかりん可愛いよ!」「……」

「ほのかに漂う少女臭！」

「……ほのかに漂う少女臭!」「……」

「加齢臭じゃねえ！」

「……加齢臭じゃねえ!」「……」

「少女臭だ！」

「……少女臭だ!」「……」

「ほら兄弟！ 声が小さいぞ！」

「ハイッ!!」

——その形態は実に様々だ。

「見た感じ年がたってそうだが、着いてくるとは中々スジが良いじゃないか」

「アリガトウゴザイマス（モミモミ）」

「ゆっくりしていつてね！（モマレモマレ）」

「お、何を揉んでるかと思えば『ゆっくり』じゃないか。この辺じゃ珍しいな」

「ソウデスカ（モミモミ）」

「……気に入ったのか？」

「…………（モミモミ）」

——ただ…。

「まあ、もう少ししたら再開するから、それまでに」

「それまでに、何かしら？」

「なっ!?!」

「…………!?!（モミモミ）」

「変な格好で私の名前を叫んで回るなんて、良い根性してるじゃない……スキマ送りね」

「えっ…………うわあーっ！」

「オオーッ！」

※

※

※

変更

宇宙人ジョーンズ：農民

滞在記録：農村その3

「ほらジョーンズさん起きて」

「ユツクリ…ツミブクロ…ハッ！」

「？ 何それ、聞いた事無いわね」

「……」

「大丈夫？ この短い休憩でうたた寝なんてしてると思ったらうなされてるし」

「それにどうしたの？ 低反発枕なんて両手に抱えて」

「……大丈夫デス」

「大丈夫なら良いわ。私達は先に行って稲を刈り取って束ねておくから、後で稲木の組み立てをお願い」

「：ワカリマシタ」

「あなたの分の缶コーヒーもあるから、飲んでからで良いわよ」

「穰子様、ジョーンズさんは起きやしたかい？」

「ええ、今起きた所だから大丈夫よ。私も今から戻るわ」

「分かりやした」

「それじゃジョーンズさん、先に行ってるからね（ヒラヒラ）」

——この惑星に、ゆっくりは、

「……（プシュ）」

／
ユツクリシテイツテネ！

「!？」

——居る。

滞在記録：農村その4

『皆さーん！ ついにお待ちかねの季節が、やって参りましたあああああ!!』

『『『『ヒューツ!!』』』』

——この惑星では、秋と呼ばれる季節になると、

『炊き立て新米のご飯が、食べたいかあああああ!!?』

『『『『イエーツ!!』』』』

『ホクホクの石焼き芋に、齧りつきたいかあああああ!!?』

『『『『イヤツフーツ!!』』』』

——祭りと呼ばれる大騒ぎを始める。

「しかし、穰子様も例年より随分調子が良いな。ハイ、って奴か?」

「……今年は普段の調子を見たせいか、余計に落差が大きく見えますぜ」

「ああ、いつもは祭りの時に少し話をする程度だったしな」
「……………」

——無事に食物を得た喜びを分かち合う為の、一種の儀式のようだ。

『さあ、今年は何ともう一人！ スペシャルゲストまで呼んじやいましたー!』

『『『『おおーっ!!』』』』

『幻想郷の、紅葉、彩り、秋を司る、二柱が片割れ!』

『私の姉さんこと、秋静葉です!!』

『『『『うおおーっ!!』』』』

『ぎ、姉さん。マイクのスイッチは入ってるからね!』

『……この度は、私も呼んで頂き、誠にありがとうございます』

「へえ……静葉様自体もそうですが、綺麗なドレスですなあ」

「ああ、いつも穰子様が言ってたが、毎年自分に見せる為だけにせっせと作ってるらしいな」

「そりゃあ勿体ねえ。今みたいに前の分も披露出来ても良いと思うんですがねえ」

「まあ喋るのはここまでにしとくか、話が終わったらスイッチの準備だ」

「勿論でさあ」

「ワカリマシタ」

——全くご苦労な事だ。

『(中略)……なので、来年も皆さんが無事に秋を迎えられますよう、祈りを込めて』

『私と穰子の二人で、踊りを披露したいと思います』

『』『』『おおーっ』『』『』

『という訳で、一曲行ってみましょー!!』

「さあジョーンズさん、今ですだ!」

「ワカリマシタ……ハッパ!! (ポチッ)」

※ ※ ※ BGM再生：稲田姫様に叱られるから ※ ※ ※

『お二人が一緒に居る所を見たのは初めてだが……すごい』

『ああ、目を瞑っているにも関わらず、キレッキレの動きで息もピツタリだ』

『こりや俺達も負けちゃいけないな、行くぞ! (スポット)』

『応!! (スポット)』

「さあ、ジョーンズさん、あんたも舞台上がる番ですぜ」
「ハイ」

「おつといけねえ、こいつを被って下せえ」

「……コレハ？」

『『農袋』でさあ。大丈夫、前は見えるし息も通る親切設計ですだ』

「そう、毎年俺達はこのつを被って祭りを楽しむんだ」

「さあ行って来いジョーンズさん。照明は俺達二人に任せてくれ」

「……ハイ！（スポツ）」

——しかも……。

『すげえ……ジョーンズさんまで飛び込みで参加してる』

『しかもお二人に負けず劣らず鮮やか……』

『よし、これは本気を出さざるを得ないな。うおおお！』

『ジョーンズさんに続けええええ!!』

※

※

※

「しかし今年は特に派手だったな（ゴソゴソ）」

「へい、ついでに片付けるのも大変でさあ（ゴソゴソ）」

「………（ゴソゴソ）」

「皆舞台まで突撃してきて、セットが倒れるのは予想外だったな」

「……舞台裏のあつし達の方だったおかげで、怪我人が無かったのは幸いでさあ」

「……ジョーンズさんさつきはすまなかつた、おかげで助かつた」

「……イエ（ゴソゴソ）」

——この惑星の神々は、

「あら三人共、設営と片付けありがとうございます」

「おお穰子様、さつきはお疲れ様です」

「……あれ？　そういや静葉様は？」

「もう帰っちゃったわ。自分は人里に長居すべきじゃない、って」

「……そういうもんですかねえ」

「姉さんは元々人前に出たがらないからね。ああして連れてくるだけでも大変だったもの」

「……何なら穰子様と一緒に居て下されば嬉しいんだけどな」

「そうそう、この農村にも華が増え「調子に乗るな」痛てっ！」

「……ふふ、伝えておくわ。　そうそう飲み物を用意したから休憩しましよ」

「おお、ありがとうございます（グビグビ）」

「ありがてえありがてえ（グビグビ）」

「ほらジョーンズさんにはこれね」

「アリガトウゴザイマス（プシユ）」

——人間と変わらず、繊細だ。

転戦記録：外々天界 幕間

※ ※ ※紀元前480年、テルモピュライ街道※ ※ ※
宇宙人ジョーンズ：スパルタ兵（最前列）

「奴らはここで食い止める、我々はここで戦う！ 奴らはここで死ぬのだ!!」

「盾の誇りに賭けて！」

「「「「「おおーっ!!」「「「「「

「オーツ！」

「今日という日を覚えておけ、そなたらの名が歴史に刻まれる日だ！」

——この惑星の住人は、何万年もの間、

「奴らに何も与えるな、奴らから奪え！ 全てを!!」

『『『『『うおおおおおおおっ!!』』』』』ドドドドドドドドドドドドドドドド
ド』』』』』

「来たぞ!!」

『『『『『ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!』』』』』

「グッ……!!」

「押せーっ！ その程度のカかあーっ!!」

「ジョーンズッ！ 押せ！ 押せえーっ!!」

「ッ……オオーツ!!!」

——戦い続けてきた。

※ ※ ※ 1184年、一ノ谷の裏手、鉄拐山※ ※ ※
宇宙人ジョーンズ：騎馬武者（義経直屬）

「見ろ、奴らは崖を背にして安心しきっている。今ここで駆け下りれば、勝機はある」

「正気ですか!? こんな険しい崖を降りると言うのですか!」

「馬を二頭、馬具を外して降ろさせる。ここからなら奴らからは見えまい」

「ヒヒーンツ!!?!」（ガラガラガラ）

「ああつ! 馬の片方が転んでしまいました!」

「だが見ろ、もう片方は無事に降りたではないか。心して下れば馬を損なうことはない」

「そ、そんな、だからって」

「ははっ、まさか後世の者も本当に降りると思うまい。ジョーンズも準備は良いか?」

「……………」（コクリ）

「皆の者、駆け下りよ!!」（パシツ、ヒヒーン!）

「三浦では常日頃、ここよりも険しい所を駆け落ちているわ!（パシツ、ヒヒーン!）」

「佐原殿まで……………うわあーっ!もう滅茶苦茶だあーっ!（パシツ、ヒヒーン!）」

「……………」（パシツ、ヒヒーン!）」

——戦い方やその目的は、時代や状況によって入れ替わっているに過ぎない。

※ ※ ※ 数年前、『外』某所、将棋教室※ ※ ※
宇宙人ジョーンズ：アマチュア棋士

「……………」（パチリ）

「……ふむ、お前も中々やるな。待った、は無しか？」
「無シダ」

「そうか……すまない、正直これ程とは思わなかった（パチリ）」
「……………」（パチリ）」

——ただ…。

※ ※ ※現在、天界比那名居邸、天子の私室※ ※ ※
宇宙人ジョーンズ：天子の使用人

「……………」（パチリ）」

「へえ、結構やるじゃない。こんなに頭を使ったのは久しぶりよ（パチリ）」

「……………」（パチリ）」

「とは言っても、将棋盤自体引っ張り出すのも久しぶりだけどね。柄じゃないし（パチリ）」

「……………」（パチリ）」

「……………ちよつと待って」

「イヤ、無シダ」

「そういう意味じゃないわ。試合そのものが中止よ」
「……………?」

「またお迎えを名乗る連中が来たみたい。巻き込んだら悪いから下がってて」

「…………ワカリマシタ」

——この惑星の住人は、

※ ※ ※同時刻、比那名居邸外部※ ※ ※

「お姉様、ここがあの子のハウスね！」

「ああ、そうだ。奴の部屋はこの見取り図に書いてある」

「はい！ これを成功させて、私とお姉様を馬鹿にした奴らを見返してやるんだから！」

「……そうだな。だが身の安全が最優先だ。これは弾幕ごっこなんてお遊びじゃない」

「うん、気を付けるね」

「よし、私が正面から奴に戦いを挑む。合図が届いたら裏口から侵入するんだ」

——これからも、戦い続ける。

滞在記録：天界、比那名居邸

「中々やるじゃない、死神の癖に（ギイン！）」
「こっちは実行部隊だからな、そうでなきや飯の食い上げだ（ギャン！）」

——この惑星の住人は、暇を持って余すと、

「あなたの精神攻撃とやら、中々斬新で良いじゃない」
「お褒め頂けて光栄だな。こっちは剣以外に特技は無くてもね（スツ）」
「つまりあれよね、“精神世界の闘技場”って奴？（ダツ）」
「しかしっ！ 流星は天人だ、単純な早さがこれほど厄介とは！」
「褒め合うってのも悪い気は、しないわねっ！」

——大抵は碌な事にならない。

「やるな天人……緋想の剣無しでここまでとは」
「それより良かったの？ 精神世界とは言え私にまで同じ剣を貸すなんて」
「言つたらう？ 私に合うのは剣しか無かった。鎌なんて振るつてられるか」
「随分変わった死神ね。私達、似てるような気がしない？」
「同感だ。立場さえ違わなければな」

——全く、本当に理解出来ない。

「それより、早く決着をつけた方が良いんじゃないか？」
「何を言ってるの？ 私なら時間はたっぷりあるし、まだまだ楽しめるじゃない」
「……いつまでそう言っているのか見物だな（ニヤリ）」
（おかし……今までの死神と何か違う、何を企んでる？）

※ ※ ※天界：天子の部屋の外の廊下※ ※ ※

「そろーり、そろーりと……」

「……………」

「よし、誰にも見つかってないね」

「……………」

「この初任務を成功させて、お姉様に認めて貰うんだ……！（スツ）」

「お姉様から頂いたこのダガーナイフがあればイチコロ、の筈！」

「……………」

※ ※ ※以下回想※ ※ ※

（今回は初の任務だが過酷なものになる。説明するからよく聞くん
だ）

（これから討伐しに行く相手は天人、生半可な武器では傷をつけるの
も難しい）

（だから、重要な役目を任せよう）

（まず私が奴を精神世界に引き込んで戦う。だが私もそれで倒せると
は思っていない）

（そこで出番って訳だ、だからこのナイフを預けておく）

（こいつは対天人用に特別に鍛えた一級品だ。だがただ斬りつける程
度では駄目だ）

（精神世界に居る間、私も相手も無防備だ。そこで天人にバレずに近
づき）

（心臓目掛けて、思い切り突き立てろ）

※ ※ ※以上回想※ ※ ※

「はうー、お姉様があたしを頼ってくれるなんて、やっとこの日が来た
のね」

「……………」

「この扉の向こうがターゲットの部屋ね…さあ頑張らなくっちゃ！」
「……………」

——ただ…。

「……無防備だな」

「っ!？」

「……………」

「うそ……何であたしが見えるの？ ターゲット以外には見えないはずじゃ」

「……(スツ)」

「えっ」

「……………」

「か、返して！ お姉様がくれた大事な…!」

「……(バキンツ)」

「あ……………」

※ ※ ※精神世界※ ※ ※

「ぜえ、ぜえ……あなたも結構しぶといわね、過去最高じゃないかしら？」

「フー、フー……またもお褒め頂き、光栄だな」

(遅い……あいつはまだなのか)

「(ピーッピーッピーッ)っ！ 緊急チャンネルだ、失礼!」

「何よ、私を向こうに回しておいて待たせる気？」

「待てと言っている……私だ、どうした!」

『お姉様……ごめんなさい』

『ナイフ、壊されちゃった』

——この惑星の死神は、

※ ※ ※天界：天子の部屋※ ※ ※

「成程ね……私を足止めしてゆっくり止めを刺す作戦、か。死神の癖に考えたわね」

「……………」

「お姉様……ごめんなさい……ごめんなさい!!」

「さて、この不届き者はどうしてくれようかしら」

「や、やめろ！ 全て私の責任だ！ 手を出すんじゃない!!」

「冗談。二度と来ないなら……と言いたいけど、あなた達だってそうもいかないでしょ」

「ぐっ……………」

「……………」

「ひとまず今日の所は帰って頂戴。それで開放してあげるわ」

「お姉様……」

「気にするな、無事だっただけでも良いさ。……………いつか必ず、勝って見せる（ヒュンツ）」

「……………」

「あーあ、退屈は紛れたけど疲れちゃった」

「……………」

「しかし死神を見破る、あまつさえ制圧するなんてやるわね。私より天人の素質あるんじゃない？」

「…………ドウゾ」

「あら、丁度飲み物が欲しかったのよ、気が利くわね（プシュ）」

「…………（プシュ）」

「外の世界の飲み物、ね。何度飲んでみても不思議な味」

——ほろ苦い。

滞在記録：農村その5

「……………（ガラガラ）」

「ねえ……………」

「……………？（ピタツ）」

「あなたは取って食べても良い人類？」

——この惑星の住人は、秋という季節になると、

「…………人類ジャナイ」

「そーなのかい、でもやっぱりお腹空いたわ」

「…………ホレ」

「これはこれは美味しそうな焼き芋。頂きます」

「……………（ヒュンツ）」

「ごちそうさまー、ありがとう…………って、あれ？」

「どこに行ったんだろ？」

※ ※ 人里：街中 ※ ※ ※

「イーシャーキイモー、オイモツ！ イーシャーキイモー、オイモツ！
（ガラガラ）」

「あ、焼き芋屋さんだ！」

「一つ下さい!!」

「ハイヨツ！」

「ありがとうございます。じゃあ早速、頂きます！」

「もぐもぐ…………お、今年のお芋は何か違うね」

「本当だ…………何か優しい感じがする」

——食欲が増大する傾向にある。

「今日も今日とて誰も驚いてくれない……お腹空いたなあ」
「……………(ガラガラ)」
「む、いつかのお化けさん! (グウウウ)」
「……………(ピタツ)」
「あ……………もうだめ……………(グウウウ)」
「……………ドウゾ」
「え、わ、私にも…ですか?」
「……………ありがとう、お化けさん (モグモグ)」
「……………(ガラガラ)」

——その食性も多岐に渡り、果ては人肉どころか心を食らう者すら存在する。

※ ※ ※農村※ ※ ※

「戻りマシタ」

「あら戻るの早いじゃない。お帰りなさい」

「おおジョーンズさんお帰り! 俺のこの焼き芋は売れたか?」

「完売デス」

「よしよし。今年は穰子様も頑張って下さったし、そうでなくっちゃあな」

「私だけじゃないわ、あなたも皆も頑張って世話したからよ」

「あつしも今戻りやした」

「お、そっちはどうだった?」

「へい、ジャガイモの方も無事完売御礼でさあ」

——ただ…。

「さて、そろそろ冬が近いけどどうしようかしら」
「……………そういえば穰子様、今まではどうしてたんです?」

「そうね……実を言うとあまりよく覚えていないの。一番苦手な季節だつてのもあるけれど、私以上にやる事が無い姉さんなんか不透明度50%くらいになったりしてるわね」

「ただ妖怪の山の麓で蹲ってるくらいしか記憶が無くて」
「するつてえとあれですかい？ 外で言う所のホームレ」
「……お願い、言わないで」

——この惑星の住人達は、

「フオッフオッフオッフ、話は聞かせてもらいましたぞ」
「……………！」

「村長！いつの間にも！」

「あら『村長さん』、前回よりやけに嬉しそうね」

「村長さん！ 一話以来出番が無かった村長さんじゃないですかい！」

「最後だけやかましいわ阿呆!! ……おほん、それで穰子様の件についてなんじゃが」

「穰子様、もし良ければ村に住んで頂けないかの？」

「…良いのかしら、私は秋の作物以外には役立たずも良い所よ？」

「主食たる米や芋は秋の作物、それに種を播き世話をしなければ収穫には繋がらん」

「むしろ今まで目先のご利益しか見ず、祭りでしか呼ばなかったのがそもそもおかしかつたのじゃ」

「……言うようになったじゃない、昔は鼻を垂れてた癖に」

「村長にもそんな頃があったのか」

「ええ、10にもなつてなかった頃なんか、祭りの後『お姉ちゃん帰らないで！』つて泣きついてきてね」

「へええ、今じゃ想像も出来ないですなあ」

「…すまぬ、言わないでくれ」

——焼き芋と同じで、

「で、私が住む所はどうするの？」

「村中央の集会所を増築するつもりじゃよ、今年の豊作でようやつと資金に目途が立った」

「でもそれ村のみんなから集めたお金でしょ？ そんな事に使っちゃって大丈夫なの？」

「村の皆がそれを望んでおるからじゃよ。ほれ、外に集まって来ておる」

「そうだそうだ、穰子様が居て下されば安泰だ！」

「今年も無事に冬を越せそうなんだ、これくらいはしないとな！」

「それに今更変に社を立てて祭るよりそっちの方がずっと良い！」

「そうそう、この村にも華があつて良」あんた、またそんな事を！」痛っ！かあちゃん勘弁してくれ！」

「それに幻想郷に農村はここだけじゃ。：お願いします」

「そんなに頭を下げないで。私も皆に助けられたのは同じなもの」

「神の名に恥じないように頑張るから、有り難く世話になるわね」

——温かい。

滞在記録：人里の寺子屋

「来た来た！ 新しい先生が来たよ！」

「やめておいた方が良くと思うけど」

「良いじゃん、一回くらいやってみたかったもんこういうの」

「教室の扉の黒板消し……はあ、もう知らないよ」

「……………（スタスタスタ：ピタツ）」

「あれ、止まった？ 気付かれたかな」

「……………（ピーツ、ジュツ!!）」

「「「!?!」」」

——この惑星の、子供達と呼ばれる存在には、

「……………（スタスタスタ）」

「こ、黒板消しが、炭に……！」

「オハヨウゴザイマス!!（ドンツ！ グシャアツ!）」

「「「!?!」」」

「なっ、教卓が……！」

「遅くなった、みんなおはよう（スタスタ）」

「「「……………」」」

「返事が聞こえないな。もう一回言ってくれないか？」

「「「お：おはようございます」」」

「よろしい。……おやジョーンズ先生？ 私が遅刻したせいとは言

え、少々力み過ぎじゃないか？」

「……………（ピーツ、ガツシャン）」

「「「!?!」」」

「教卓が……今度は一瞬で元通りに！」

「そうだ。授業を始める前に、皆に紹介しないといけないな」

「……………」

「今日からここで臨時教師をして下さるトミー・リー・ジョーンズ先生だ。喋るのは得意ではないが、以前も教師をしていたそうだ。皆、仲良くして欲しい」

「……ヨロシクオネガイシマス」

——やはり全身でぶつかって行かなくてはならない。

「—それで、1184年に一之谷の戦いが起こった訳だが……」

「……………(カリカリカリ、カツカツ)」

(ジョーンズ先生が黒板で慧音先生が解説か…ちよつと眠いなあ)

「で、一之谷の戦いにおいて有名な『逆落とし』、どこで行われたと言われているか、分かる者は居るか?」

「はい、一之谷裏手の鉄拐山説と、東に8kmの鴨越説です」

「素晴らしい。だがこの二つに限らず、そもそも逆落とし自体が行われていないとする説もある。残念ながら、今となつては真実は分からないんだ……」

(…………zzz…………zzz)

(おい、起きろよ。このままじゃ先生から頭突きが)

「(カツカツカツ)……………!!(ヒュンツ…………バスッ!)」

「……………」

「なっ!!今、何が起きたんだ!?!」

「うーん…………あれ?何か頭の上が涼しい」

(うわあ、逆モヒカンって言うのかなこれ)

「見事だ、ジョーンズ先生。私もこのくらい上手くチョークを投擲出来ればな」

(……(何それ怖い……))

「そこで、平敦盛が組み伏せられ…………おっと、そろそろ時間だな。各自、予習と復習は欠かすんじゃないぞ」

「……………」

「分からない事があつたら、いつでも聞きに来るように。では解散!」

——だが…。

※ ※ ※夕方、職員室※ ※ ※

「おや、今日も君か。どうした？」

「あ、あの……先生……」

「また何か分からない所があったのか？ 遠慮せずに言ってみるんだ」

「あ、あの、僕……」

「？」

「せ、先生の事が……」

『声ガ小サイ!!!』

「!?!」

——この惑星の教育でも、ここ幻想郷に限っては、

※ ※ ※数日後、同職員室※ ※ ※

「想像以上に凄いじゃないか、ジョーンズ先生（カリカリ）」

「……………イエ（カリカリ）」

「元々皆悪い子達じゃないんだが……居眠りをする事も無くなったし、今まで以上に熱心に取り組んでくれるようになった。率直に言つて悔しい位だよ（カリカリ）」

「……………（カリカリ）」

※ ※ ※以下回想※ ※ ※

「でも、君は……良い教師になる！」

※ ※ ※以上回想※ ※ ※

——このくらいで、丁度良いらしい。

「(カリカリ……パサッ) うん? 何だこれは?」

「……………」

「メモ用紙……見た事無い記号ばかり書いてあるな。ジョーンズ先生、何か知らないか?」

「……私デス」

「ああ、何か書き留めるのは構わないが、所構わず置かないで欲しい。あの子たちも時々来るし良い手本にならないからな」
「気ヲ付ケマス」

——そして、この惑星の妖怪は、

※ ※ ※同日、慧音の部屋、夜※ ※ ※

「やっぱり来てくれたか」

「……(サツ)」

「久しぶりだなジョーンズ。君ならあの暗号くらい簡単だったかな」

「……ホワイトトレイ」

「直ぐに明かせなかつたのは許して欲しい。訳あって『彼女』の中に居候してる身なんだ。それも、妖怪『ハクタク』に成り済ましてまで」

「……………」

「おっと、誤解しないでくれ。『ハクタクとしての能力』の幾つかは『彼女』に貸し出しているけど、今みたいによっほど必要でもない限りは『表』に出てこないようにしているんだ。」

「……………」

「満月が綺麗だろう? だがその度に、こうやって角と尻尾を生やしていないといけないのは難儀だけだね」

「……………大変だな」

「この惑星のあちこちを飛び回っている君程じゃないさ。『私』は表に

出ない限り悟られる心配は無いし、『彼女』の見聞きする事は何もかも面白いからね。ふふっ……君も中々良い教師になれてると思うぞ」

「……………」

「さて、そろそろ『彼女』に主導権を返さないといけないな。今の会話は『少しボーっとしていた』くらいの認識しか出来ないよう細工しておくけど、『彼女』は今気が立ってるからね。幾ら君でも角ごと頭突きは堪えると思うよ」

「歴史書の編纂は満月の夜しか出来ない。『私』なら出来なくはないけど、『実際のワーハクタク』と同じように能力を縛ってないといけないんだ」

「…………ワカッタ（ピシヤン）」

「……………」

「……………（プシユ）」

———たまに、宇宙人だ。

滞在記録：街中く農村その6

「コレクダサイ」

「あいまいどっ！ ほらお釣りと福引券だ！」

「……………」

「あつちの方で商店街合同の福引をやってるんだ、いつペンどうだい？」

——この惑星には、古来より音と音を組み合わせた音楽という文化がある。

「この券なら一回分だね、お客さんの幸運を祈ってるよ（ガラガラ）」

「おお！（カランカラン！） 2等、今夜の演奏会優先席4名様ご招待チケットだああ!!」

「……………」

「今夜、広場で演奏会があるんだ。一般席もあるから、良かったら知り合いも呼んで来てくれよ！」

——『外』の調査で感じた事だが、その殆どは耳障りな騒音だった。

※ ※ ※農村：中央集会所※ ※ ※

「へえ、買い出しに行ったらチケットが当たったのね」

「しかし四人分か…………どうするか？」

「あつしもちよつと気になる所ですが…………ねえ？」

「……………（スツ）」

「あら、私にくれるの？」

「……………」

「でも残り三人はどうする？ いや、俺がどうしても行きたい訳じゃないんだが……」

「じゃあ、穰子様に誰が行くか決めて貰いやしうぜ」

「そうね、それじゃあ……」

※ ※ ※街の広場・夜※ ※ ※

「……結局、あの場にいた四人で決まりか」

「何だか、あつしらしいもこの組み合わせになってるような気がしまさあ」

「そうね、でもあの場で話を聞いていたのはあなた達二人だけだし、当たたのはジョーンズさんだもの」

「……………」

「さて、そろそろ始まる時間ね」

——ただ……

「さあさあ皆さんお待ちかね。プリズムリバー騒霊楽団、リーダーのルナサだ」

「仕事疲れの神様も、調査ばかりの宇宙人も大歓迎、メルランだよー」

「人里から冥界まで、依頼があれば即参上！ リリカでっす！」

（へえ、あれが噂の楽団か。話には聞くが初めて見るな）

（三人とも手ぶらなのに楽器が宙に浮いてるのは流石ね）

（確か…三人ともポルターガイストとか言う霊だから出来るとか何とか）

「……………」

「私たちの演奏が、どうか今日集まってくれた皆様と」

「願わくば、空の遙か向こうまで届く事を祈って」

「では本日最初の曲！ 『人恋し神様』！」



「……………」

(落ち着くような、高揚するような不思議な気分だ)

(何だか姉さんを思い出すような良い曲ね)

(ちよつと穰子様すみません)

(何、今演奏中なんだけどうしたの?)

(ほら、ジョーンズさんの横顔が…………)

——この惑星の、プリズムリバーは、

「……………(ツーツ)」

(…………本当ね、表情は変わらないけど)

(…涙が)

——泣ける。

外出記録：『外』某所、撮影スタジオ 幕間

「ジョーンズさん、準備はよろしいですかー？」

「ハイ」

「お二人も大丈夫ですかー？」

「こつちも大丈夫ですー」

「では、3：2：1：アクション！」

——この惑星の住人は、『モノの価値』をやたらと誇張して広めたがる。

「宇宙人がさ、人間に紛れて普通に生活してるって話知ってる？」

「いや？」

「地球の調査してるんだって」

「…？」

「しかも映画見て人間に化けたらしくて、トミー・リー・ジョーンズそっくりなんだってww」

「何だよそれwwww」

「さて、行くか。……ごちそうさまー」

「ありがとうございましたー」

「……………」

——テレビCMを初めとして、その手段も多岐に渡り、

「はいカット！ OKOK!!」

「……………」

「では次は店の外のシーンに移りましょう」

「ワカリマシタ」

「ジョーンズさん、お疲れ様でしたー！」

「才疲れ様デシタ！」

——時に不必要とも思える程の労力を掛け、

「店のドアを開ける所からなので、出口の前をお願いします」

「ワカリマシタ」

「では、3…2…1…アクション！」

「……………（ガチャツ…スタ、スタ、スタ）」

「……………（プシュ、グビツ）」

「はいカット！ 今度もOKですー」

「才疲れ様デス」

「いやあ、連続で一発OKを撮れるなんて今日はついてますね！」

「……………」

「表情や動きまで全部、『化けた宇宙人』のイメージに合致してて…流石ですー！」

「……………」

「機会があればまたお願いしますね、ジョーンズさん！」

「……ハイ」

——そして選ばない。

※ ※ ※ 幻想郷：農村 ※ ※ ※

「戻リマシタ」

「おおジョーンズさん、いつの間に戻ったのか」

「あら、お帰りなさいジョーンズさん、何日もどこほつつき歩いてたの？ 書置きが残ってなきや今頃搜索願いの一つも出そうかって所ね」

「少シ散歩ヲ」

「ふーん……只でさえこの村は人里の外れなのに、妖怪もたまにうろ

ついたりして危ないわよ？」

「気ヲ付ケマス（スタスタ）」

——ただ…。

「しかしジョーンズさん、まるで野良猫みたいな人だよなあ」

「野良猫？」

「たまにふらつと居なくなつたと思つてもまた帰つて来るし、何考えてるのか分からない事多いし」

「…：確かにそんな感じね」

「それも丁度、作業が落ち着いて暇になつた時を見計らつてるみたいなんだよな。俺たちの知らない所で、何か厄介事に巻き込まれてなければ良いんだが」

——この惑星の、『缶コーヒーの価値』は、

「……………」

「……………（プシュ、グビツ）」

——計り知れない。

滞在記録：玄武の沢 前編

「……………(ザツザツザツ)」
「……………」

——この惑星の河童と呼ばれる種族は、水と生きているらしい。

「……………」

——しかも実際に水辺に居ながら、機械技術への高い関心も併せ持っているらしい。

「……………おやおや、帰ってみれば面白い客人だね」

「ねえにとり、本当に見てるだけで済ますつもり？ 勝手に入り込まれてるのに……………」

「だからこそ、さ。一人とはいえ徒歩なのに、天狗様達も気付いてない」
「……………確かに妙ね」

「取り敢えず見張ってみよう。アジトに入れなかったのは今に始まった事じゃないし」

——ここ幻想郷の水は、『外』と何かが違うのだろうか。

「……………(ドドドドドドドドドドド)」

——私も三日三晩、水と生きてみた。

「うわあ、何か合掌して滝行を始めた…」

「仙人、て感じでもないね。そうだとっても修行にしちや古典的過ぎ」

るけどさ」

「でも大丈夫かな、私達ならともかく」

「多分大丈夫さ、人間の見た目で人間じゃない奴なんてたくさん居るし」

「……いざとなったら私が行くね」

※ ※ ※一日経過※ ※ ※

「……………(ドドドドドドドドドド)」

「凄い……ずっと立ったまま両手まで広げてる」

「そーいや見てて思ったんだけどさ」

「うん？」

「あのポーズ、何か見覚えがある気がする」

「えっと…『聖者は十字架に磔られました』みたいな？」

「『人類は十進法を採用しました』にも見えるな」

※ ※ ※二日経過※ ※ ※

「いやあしかし、タフだねえ。本当に人間じゃなさそう」

「うん……」

「両手までゆっくり回し始めて、余裕の……って、大丈夫かい？」

「ふあああ…ちよつと寝ていい？」

「仕方ないなあ、後で交代ね」

「zzz…zzz…」

※ ※ ※三日経過※ ※ ※

「……………(プカプカ)」

——何も分からなかった。

「滝壺で浮いてる……本当に大丈夫かな」

「大丈夫そうだな、顔は水から出てるし息もしてる。それに顔色も悪くない」

「何者なんだろう、あの人……」

「……………（パチツ）」

「あ、目を開けた」

「しかも岸に上がって来るね……こつちの方向に」

——水と生きる、この不思議な種族に、

「げっ……目が合った」

「にとり、光学迷彩のバッテリーはまだ持つはずよね？」

「いや、あの目つきは間違いない。もうバレてる」

「嘘……！」

「こうなったら仕方ないね、私が話をつけてみるよ」

「うん…気を付けて」

「……………（ザツザツザツ）」

「ハローヤーヤー、盟友よ、私達のアジトに何か用かい？」

「……………」

——私は、加わってみる事にした。

滞在記録：玄武の沢 後編

「……………(ギリ、ギリ)」

——この惑星の河童と呼ばれる種族は、未知の技術や存在に対して、

「おー、盟友も結構やるじゃないか。バラバラの部品から自転車を組み上げるなんて」

「……………」

「それでちよつと頼みがあるんだけど、この四角い板を見てくれないか？」

「……………」

「ちよつと最近の物らしいんだけど、電源を繋いでも何しても映らないんだ」

「……………(バシッ!バシッ!)」

「それで困ってて……………おおい! 精密機械を乱暴に叩くんじやないよ!」

「……………繋イデミロ」

「え? あ、うん(カチッ)」

『(パチッ)では、今週の一押しはこちら!』

「うわあ動いた! 凄いいじゃないか盟友!」

「しかしこれが『薄型テレビ』って奴か、どういう仕組みなのかね」

「……………」

——飽く事無き興味を抱いている。

「……………戻ったよ」

「にとり、どうだった?」

「ビンゴさ。手先の器用さも勿論だけど、奴は不思議な力まで持って

る」

「不思議な力？」

「今『外からの品』を渡して見たら、二回素手で叩いただけで稼働するまでに直ったんだ……私が一回開けて、中の配線をズタズタに千切ったにも関わらず」

「そんな事……！」

「ああ、しかも見た所奴は妖怪でも神々でも、増してや人間でもない。恐らく私達どころか『外』すら遥かに超える技術を持つてると見た」
「……ちよつとばかり、手持ちの提供をお願いしてみようか(ニヤリ)」

「…………… (カチャカチャ、ギユツ)」

「おう盟友、お疲れさん！ この辺でちよつと休憩にしようか」
「……………」

「ほら差し入れだ、これでも飲んでゆっくりしてくれ」

「…………… (プシュ グビツ)」

「…………… (ドサツ)」

「ふう、月並みだけど案外効くもんだね、睡眠薬は」

※ ※ ※アジト内：拘束部屋※ ※ ※

「おお、お目覚めのようだね。気分はどうだい？」

「……………」

「いきなりこんな事をして悪いとは思うけどさ、こうでもしないと聞いてくれないと思ってね」

「……………」

「盟友がどこから来たのか、何者なのかはちよつと気になるけど、私達の目的はそれじゃない」

「私が一番気になるのは、『何を使ってここに来たか』なんだよ」

「つまり、私は盟友の使ってるであろう『乗り物』が気になるのさ」
「……………」

「なあ盟友、正直に言うと、君自身を痛めつけるような趣味は無いん

だ」

「我々の技術の進歩の為に、乗り物とやらを調べても良いかな？」
「…嫌ダ」

※ ※ ※アジト内：拘束部屋外側の廊下※ ※ ※

「全く…そこは良いとも！だろうに、ねえ」

「う、うん……」

「……………」

「ま、まあ言ってたけど多分協力してくれるよね」

「ねえにとり、今から何か実験でもしに行くの？」

「？ いや、これからどうやって聞き出そうか考えに行く所さ」

「……………」

「あれ、それじゃあ……」

「？」

「何で、彼も一緒に着いて来てるの？」

「っ!？」

「…ッ！（ダッ）」

——ただ…。

※ ※ ※玄武の沢の外：森の中※ ※ ※

「何て人……いつの間に拘束を外すなんて！（ドタドタ）」

「かーっ！ あれ結構な自信作だったんだけどね！（ドタドタ）」

「……………！（ジャラジャラ：チリンチリン）」

「しかもちやつかり私の自転車に乗ってんじやないよ！ 返してえー
！」

「整備されてない森の中で…やっぱり凄い人」

「感心しないで早く追うよ！ 空を飛んだら天狗様に気付かれるか

らね!」

「う、うん!」

——この惑星では、宇宙人だとバレると、

「……!! (チリンチリーン)」

「しまった、そっちは崖だ!」

「……ッ! (チリリリーン)」

「ああ、行ってしまったか…」

「自転車のまま空も飛べるんだ……追わなくて良いの?」

「駄目だね。私も飛べるけど、もう妖怪の山を出ちゃってるし、人里の方向に向かっている」

「これ以上騒ぎを起こせば、またあの博麗の巫女が飛んで来るのが落ちさ」

「……はは、技術の進歩が遠のいたね」

※ ※ ※人里近郊：山頂※ ※ ※

「…… (プシュ)」

「…… (グビツ)」

——やっぱり、面倒臭い。

滞在記録：玄武の沢 後編 i f

「……………（ギリツギリツ）」
「……………（カチャカチャ）」
「……………（カチツカチツ）」

——この惑星の、河童と呼ばれる種族は、

「……………（カチャカチャ、ギユツ）」
「おう盟友、お疲れさん！ この辺でちよつと休憩に」
「ねえにとり！ ちよつと来てくれる？」
「おや、どうしたのさ？ まさかまた何か流れてきたのかい？」
「そのまさかだよ！ しかも大きな鉄の塊が！」
「…久々に大物の予感だね」
「……………」

「盟友、悪いけど休憩は後回しだ。ちよつと着いて来てくれないか」

——機械いじりが大好きだ。

「ほほう、これはまた機械というか奇怪というか、ね」
「鉄の塊というか、乗り物なのかな？ 上に蓋があるし……」
「……………」
「なあ盟友。こいつが何か、もし知ってたら教えておくれよ」
「……………チハ」
「えっ？」
「……………チハタン」

——ただ……。

「へえ！ 燃料無いかからどうしようかと思っただけ、菜種油で動くの

か！(ゴゴゴゴゴゴ)」

「……………(ゴゴゴゴゴゴ)」

「えっと、これどうやって止めるの？(ゴゴゴゴゴゴ)」

「……………(スツ)」

「そつちのペダルだつてさ！」

「おつとつと！……………ふう」

「いやあ飾りっ気も何も無いけど、何か乗つてて楽しいなこれ！」

「ちよつと狭いけど、私達には丁度いい位だもんね」

「重い、空は飛べない、油が要る、動かしにくい。だがそれが良い！」

「……………」

「ありがたいな盟友、まさか使い方まで知つてるとは恐れ入つたよ」

「(ゴゴゴゴゴゴ……………プスン) あ、止まっちゃつた」

「おや、ちよつと降りて見てみよう」

「私も降りますね。 ジョーンズさんはちよつと待つててください」

「……………」

「あー、結構煤とか詰まつてるねこりや。油を代用したせいかな」

「ねえにとり」

「うん？」

「さつき言つてた話だけど……………彼は、もう良いの？」

「そうだねえ、もう良いかな。今はこのデカブツを何とかしなきゃいけないし」

「そりゃあ奴の持つてる技術も気になるさ。でも今の私達はどうか？ この機械一つで四苦八苦さ」

「中々言う事を聞かないこんな機械を上手く扱えればどんなに楽しいか、分かるだろう？」

「うん。私もそれが良いと思うよ」

「さて…おや？ 何故か煤が無くなつてる」

「じゃあもう一回、エンジン掛けてみるね」

——この惑星の河童は、

「よし、さつきより調子が良いじゃないか！　もう少し慣らし運転と行こうか！」

「……………」

「大砲の弾は無いけれど、移動テントくらいにはなりそうだよね」

「それでも十分さ！　さあ河童隊、突撃い！」

「……ヤッタ！　ヤッタ！」

「盟友！　そりゃあ河童じゃない葉っぱだよ！」

——新しい物に、飛びつき易い。

滞在記録：農村その7

※ ※ ※村中央集会所：穰子の居住スペース※ ※ ※

「ねえ、外歩いてたらこんなもの拾ったんだけど」

「何を拾ったんで……何だこれ」

「あつしの目にはお饅頭に見えますがねえ」

——この惑星の住人には『ペット』と呼ばれる、他の生物を飼育する習性がある。

『ゆっくりして行ってね!』

「うわあ喋った!?!」

「人面で喋るお饅頭……新手の妖怪ですかねえ」

「妖怪じゃないわ。少なくとも人には無害な種類だし」

「しかしこんな生物(?!)、今までこの辺りじゃ見た事無いんだけどな」

「多分どこから迷い込んできたのよ、きつと」

「しかし見れば見るほど饅頭……手足どころか胴も見当たらねえ(ツンツン)」

『あうー(プニプニ)』

「お前はいい加減饅頭から離れた方が良いぞ」

「そうは言っても……何かに目覚めそうな感触で、つい(ツンツン)」

『うー(プニプニ)』

「やめてあげてよ、これでも結構デリケートなのよ」

「へえ、すみません。しかし頬がえらく柔らかいですなあ」

——その種類、数、入手手段……『外』もそうだが、実に様々だ。

「……………(スツ)」

「あら、ジョーンズさん抱っこしたいの？」

「……………（コクリ）」

「ちゃんと支えてあげてね、はい」

「……………」

「ところで穰子様、その生物（？）はどうするんです？ そのまま返すって風でもなさそうですが」

「せっかく拾ったんだし、私がここで世話しても良いかしら？」

「へ、か、飼うんですかい？」

「大丈夫よ、村中の田畑にこの子が加わった所で私には負担じゃないもの」

「いや、それよりここは一応集会所と繋がってるし、大丈夫なのか……？」

「まあ、あの村長さんの事だから首を横には振らないでしょうがねえ」

「……………（モミモミ）」

『あう〜（モマレモマレ）』

「…穰子様、何か目を離れた際にジョーンズさんが」

「あら、何か面白い手つきね。頬を揉んでるだけなのに」

——ただ…。

「しかしこのお饅頭、金髪（？）に紅葉……どこか見覚えが」

「き、気のせいよ気のせい！ ほら、そろそろ晩御飯の時間じゃない？」

「おっと、戻らないと家内が」

「それじゃあつし達も戻りますだ」

——この惑星の、ゆっくりは、

「ほらジョーンズさんも、日が沈んできたしそろそろ戻ったら？」

「……………（モミモミ）」

『んう〜（モマレモマレ）』

「いや、ちよつと、抱えたまま帰ろうとしないで」

「……………(モミモミ)」

『んふ〜(モマレモマレ)』

「お風呂にも入れないといけないから明日また、ね？」

「……………イヤダ(モミモミ)」

『うふふ〜(モマレモマレ)』

「どんだけ気に入ったのよ、もう…」

——揉み心地が良い、頬をしている。

「『宇宙人現る!』 拘束も追跡も振り切り逃走』……まーたこんな記事書いてるのね」

「そう言いながら購読してる穰子様も大概でさあ」

「仕方ないじゃない、年末寒い上に外は吹雪。他に出来る事が無いんだもの」

「しかし炬燵にみかん、てのも居心地が良いな（モグモグ）」

「……………（モミモミ）」

「んふー（モマレモマレ）」

——この惑星の住人は、ただ流れ続ける時の流れに、一年という区切りをつける。

「（ヒュゴオオオオオオ）……それにしても、風が強くなってきたわね」

「おかしいな。大晦日ともなれば寒いのは例年通りだが、ちと吹雪が強すぎる（モグモグ）」

「…そう言う割に緊張感は無いのね」

「……………（スツ）」

「んー?（プヨンプヨン）」

「あらジョーンズさん、どこに行くの?」

「……………屋根ヲ見テキマス」

「ああ、すまんジョーンズさん。増々風が強くなってきたし、少し心配だったんだ（モグモグ）」

「いや思ったのなら…もう良いわ、この子は見ておくわね」

——そして、新しい一年の始まりを、訳もなくめでたがる。

※ ※ ※屋根の上※ ※ ※

「……………（ヒュゴオオオオオオオ）」

「……………マサカ（ゴオオオオオオオツ！）ウオー………ツ
!!!」

※ ※ ※雲の上※ ※ ※

「ハッハッハッハ……」

「……………」

「まだこんな所に居たのか、ジョーンズ」

「…ヤハリオ前カ、ブラツク」

「そろそろこの惑星、滅ぼすか」

「相変ワラズダナ」

「潮時だろう？」

「……………」

「……………」

「……マダダ」

「そうか…お前こそ相変わらず、甘っちょろいな」

「……………」

「む……邪魔が入るか。仕方ない、俺は先に帰るぞ」

「……………」

「好きにすれば良いさ（ヒュンツ）」

「……………」

——ただ…。

「あなたのお友達って、随分と面白い挨拶の仕方をするのね」

「……………」

「久しぶり、家政夫さん……とでも言うのが正しいのかしらね」

「……………」

「ジョーンズ……いえ、『宇宙人ジョーンズ』」

「……！」

「正直な所不覚を取ったわ。何食わぬ顔で結界に入り込んだ挙句、この私が気付けないなんて」

「……………」

「でも、ずっとここに居座ってる割には、さっきのお友達のような悪意は感じられないわね」

「……………」

「不気味だ、胡散臭いって言われるのには慣れているけど、私がそう思ったのは初めてよ」

「……………」

「あなたの目的は敢えて聞かないでおくわ。ただこれだけは覚えておいて」

「……………」

「幻想郷は全てを受け入れる場所。少なくとも、あなたに敵意が無い以上はね」

「……………」

「出来れば、さっきのお友達にも伝えておいて頂戴。滅ぼすなんて面白くない冗談、二度と聞きたくないもの」

「……………（コクリ）」

「分かって貰えたのならこれ以上私から言える事は無いわ。あなたを待っている者達も居るみたいだし、そろそろ戻った方が良いかも知れないわね」

「……………」

「それじゃあね、月の向こう側からのお客様（スツ……）」

——この惑星にはそろそろ、

「……………見届ケタイ」

——良い年が来ても、良い頃だ。

——この惑星の住人は、時に利益すら度外視した「感情」に振り回される。

※ ※ ※ 穰子の部屋 ※ ※ ※

『ウォーーーーーッッ!!!』

「っ、今のは!」

「ま、まさかジョーンズさんが屋根から!」

「なんてこった! (モグモグ、ゴクリ)」

「(ガラッ) ねえジョーンズさん大丈夫(ゴオオオオオオ) : : : うっ!!」

「穰子様、下がって! 吹雪が強すぎる!」

「こりやひでえ、あつしの視力でも山が見えやしねえ」

「とにかく、これ以上戸を開けてるのは危険だ。一旦閉めよう(ガラガラ、ピシャン)」

「待つて! 私が探しに行く!」

「無茶です、風が強くて立ってるのさえ難しいのに!」

「(ガラッ) あっ! 二人共見えました! ジョーンズさんが向こうまで飛んで行ってる!」

「何、見えないけど吹き飛ばされてるって事!」

「きりもみしてるんで間違いねえ! : : あっ、雲の中に」

「畜生、俺も飛べれば : : : !」

「私なら飛べるけど、これじゃ正直50mも行かないうちに氷漬けになる自信があるわね」

「んー! んー! (ピョンピョン)」

「心配なのは分かるわ姉さん。でも今の私達にはどうにも出来ないの」

「ほら、目から光線を出せるジョーンズさんの事だ、きつと飛んで帰っ

て来まさあ」

「俺はちよつと樂觀は出来ないけどな……ん？」

「だから穰子様も、あつし達と一旦中に戻りま……ん？」

「姉さん？」

「って何だ？」「何ですかい？」

「……あ」

——この惑星の言葉で、「意地を張る」と呼ぶようだ。

「へえ！ お饅頭がいきなりお嬢さんになった!!」

「何だこりや……今まで、化けてたって事なのか？」

「えつとね、これはね、あのその」

「……穰子、もう良いの」

「ね、姉さん」

「元々は私の我儘です。……今まで騙して、ごめんなさい（スタスタ）」

「待って下せえ！ あなた様はもしかしくなくても、秋祭りの時の静葉様ですかい!？」

「ええ。そして穰子と違って、あなた達人間には役立たずの神様でもあります」

「……ちよつと、姉さん」

「事実よ。穰子は豊穰の力で信仰を得られるけど、私は精々葉っぱ一枚一枚に色を塗っていくだけ」

「ようやく紅葉景色が出来ても、見せようと思った穰子は人間達と一緒に田畑仕事」

「ねえ穰子、以前あなたは私の紅葉を羨ましい、なんて言っていましたね」

「姉さん……」

「何が紅葉の神ですか。みてくればかり着飾っても、誰も見てくれないのな」

「穰子まで離れちゃったら……!」

——これはまた、難儀な生態もあつたものだ。

「それは違うぞ、静葉様」

「えっ?」

「俺もこの村でそれなりに農家やつてるが、毎年の紅葉は結構楽しみにしてるんだ」

「稲刈りを始める前の田は稲穂が出来てるだろ? 傍にしばらく座つて山を見てるとな」

「……風で揺れる稲穂と、遠くの山の紅葉が凄く美しいんだ」

「そうそう! それに静葉様、紅葉が落ちた後だつてあつし達の役に立ってるんです!」

「落ちた……後?」

「腐葉土、つて奴でさ。落ち葉を集めて埋めておくと、これが凄く良い肥料になりまっせ」

「ひ、肥料……」

「なあお前、もう少しマシな言い方は無かつたのか?」

「いや、だつて実益が全く無い、なんて言われたもんで」

「…それでも、穰子は豊かさと稔りの象徴、私は寂しさと終焉の象徴」

「私は元々、人里に居るべきでは無いんです。なのに、可笑しいですよね」

「……私自身が、寂しいと思つちやうなんて」

「何だ、要するにそういう事か」

「…え?」

「そうそう。寂しいって言うてくれないと、難解過ぎてあつしらには分からんです」

「なあ静葉様、さつきあなたは自分を寂しさと終焉の象徴、なんて言いましたね」

「でも秋が終われば冬が来る。そして春になって夏が来て……その次は何が来るんです?」

「あ……!」

「終わりが来るって事は、また何か始まるって事だ。俺達農家はずっと繰り返してきた」

「その通りでっせ！ あっしの言った腐葉土だって、それが次の紅葉と豊穣になるんでさ」

「まー、つまりあれだ。……お二人が揃って初めて、ちゃんとした秋が来るんだ」

「だから、別に変な生き物に化けなくても、ここに居て良いんじゃないか？」

「……!!」

「なに、どうせ村長も首を横には振らないさ」

「それに、この村にも華が足りなかったと「一言余計だ」痛っ!!」

「あら、それだと私に華が無いみたいじゃない。これでも少しは気にしてるのよっ」

「へえ穰子様、すんません。見てくれただって言うもんでつい」

「……ふふ、ありがとうございます」

——ただ…。

「フオッフオッフオッフ、話は聞かせてもらいましたぞ」

「あら、村長さんじゃない」

「村長さん！ 前回と登場セリフ同じな村長さんじゃないですかい！」

「お前も一言多いんじや阿呆！ ……さて、話を戻そうかの」

「静葉様だったかの？ 秋の祭りでは挨拶も出来なかったが、見事な舞いでござった」

「あ、ありがとうございます」

「村長さん、姉さんは結構人見知りするのよ？ 元々人と関わる事なんて無かったもの」

「おや、これは失礼」

「それにしても村長、よくこんな吹雪の中を通って来れましたね」

「吹雪？ ああ、それならさつき止んだ所じゃよ」

「何だつて？（ガラツ）うわ、本当だ」

「……あつ！ 皆山の方を見て下せえ！ ジョーンズさんが！」

——この惑星にはもう一つ、

「へえ、実は飛べるんじゃないかと思ってたが、平泳ぎとはな」

「…やっぱりあの方、只の人間ではなかったのですね」

「へえ。目から光線なんて出してたけど、やっぱり飛べるのね」

「ほう、これで村の皆が揃った訳じゃな。さ、始めるとしようかの」

「あら、もうそろそろ夜になるってのに何を始めるの？」

「静葉様の歓迎会じゃよ。なーに村の者達を呼んで準備は出来ておる」

「…やけに手が早いのね」

「悪事に限らず噂千里を走ると言うてな。村の中なら尚更じゃよ」

「少なくとも穰子様が饅頭、いや静葉様を抱えて来た時点で察しはついておったわ」

「では静葉様も来て下され。あなた様が望むなら、儂らはいつでも

歓迎しますからの」

「はー………」

——雨降って地固まる、という言葉もある。

滞在最終記録：農村その9

※ ※ ※村中央集会所※ ※ ※

「ムオツホン、では皆の衆。 静葉様の歓迎と、今年の無病息災を祝つて、乾杯！」

「」「乾杯!!」「」「」

「カンパーイ！」

——この惑星の住人は、多くの矛盾を抱えながらも生きています。

「穰子様達はともかく、やっぱりジョーンズさんも飛べたんですねえ(グビグビ)」

「まあ、目から光線だの高速田植えだのを見てると、不思議にも思わなくなるもんだな(グビグビ)」

「そーいやあジョーンズさんは結局何者なんですかい？ 博麗の巫女でもあるめえし(グビグビ)」

「……………」

「今更そんな事は良いじゃないか。 汗水流して一緒に働いてきたんだ、もうこの村の仲間だろ？」

「まあそうですねえ、少なくともおっそろしい妖怪じゃない事は確かですか(グビグビ)」

「なあお前…初っ端からちよつと飲みすぎじゃないか？」

「へえ、今年の芋で作った酒が旨くて、ついつい(グビツ)」
「……………」

ば、
——同族の似た者同士が、血で血を洗う争いをしているかと思えば、

「さあさあ村長さんに姉さん、私が注いであげるからね(スツ)」

「おお穰子様、かたじけない（コポコポ）」

「ありがとう、穰子（コポコポ）」

「ちゃんと会話に入って行かないと駄目よ。特に今日は姉さんが主役なんだから」

「ごめんなさいね、こういうのは初めてですもの」

「しかし静葉様、妹様から話は聞いておりましたが、実際にお会いするのも初めてですなあ」

「ええ、いつも妹が世話になってます」

「そう謙遜しないで下され、世話になってるのは儂らの方ですからの」
「あらあら村長さん？ 両手に華かと思ったら、もう鼻の下を伸ばしてない？」

「い、いえそんな事は」

「冗談よ。ほんの子供だった頃、祭りの度に私から離れなかったのに、今更浮気も無いでしょうしね」

「へえ、そんな事があったのですね」

「……後生じや、勘弁して下さい」

——何もかも異なる者同士が寄り添って生きている。

「へい穰子様、ついでにあつしの分もお願いしやす」

「あら、仮にも神様にお酌してって頼むつもりかしら？」

「あ……」

「冗談よ。神だけど格はあまり高くないし、一緒に働いた仲間だもの（スツ）」

「いや、こつちこそ調子に乗ってすみません（コポコポ）少し酔いが回ってたようだよ」

「美味しいのは分かるけどあんまり飲み過ぎないですよ？」

「……………」

「ジョーンズさんは……お酒はあんまり好きじゃなかったわね」

——ただ……。

「……………（スツ）」

「あらジョーンズさん、どこに行くの？」

「外二出テキマス」

「吹雪は止んだけどまだ寒いから気を付けてね」

※ ※ ※ 集会所の外 ※ ※ ※

「ふむ。 儂がここまで来た途端、察知して出てくるとはの」
「……………」

「お主なら既に気付いておるとは思うが、あの姉を化けさせたのは儂
じゃよ」

「……………」
「まさか、姉妹揃って頭を下げてくるとは思わなんだ。面白いからタ
ダで引き受けたが、あんな一言でばれたのは傑作であったぞ…………くつ
くつくつ」

「じゃが、あの様子では儂が手を貸すまでも無かったのかも知れない
がの」

「……………」
「いや、そんな露骨にがっかりした顔をされても困るのじゃが」

「確かにあの頬は自信があったが、お主の好みまでは把握しておらん
わい」

「……………」
「儂か？ 正直な所あの集まりに混ざって飲みたい所じゃが、神々と
人間の間に入るのも無粋じゃろうて」

「……………」
「さりとてここでお主と飲もうと思っても、酒は好まないじゃろ？」

「じゃから、ほれ（スツ）」
「……………！」

「以前は一本手に入れるのにも苦心したが、今では人里に出回ってお
る」

「はて…儂は知らないのじゃが一体誰の差し金かの、ククツ」

「……………」

「それにしても、あの時のような綺麗な星空じゃの。夕方に吹雪いていたのが嘘のようじゃ」

「……………」

——宇宙には、こんな惑星が、

「お主はあの向こう側からやって来て（プシユ）」

「……………」

「わざわざこんな狭い場所に、少なくとも半年は留まっておるようじゃが（ゴクリ）」

「…………お主にとつてここは、どう見えておるのじゃろうな？」

「……………（プシユ）」

——「つくらい、あつても良い。」